

第39回京都府文化賞受賞者紹介

別紙

受賞者の特徴等	<p>○癌治療への応用も期待されるタンパク質「カドヘリン」を発見し、ガードナー国際賞を受賞した細胞生物学者・発生生物学者の竹市雅俊氏、伝統的なモチーフを斬新なデザイン文様で表現した友禪を発表している染色家で、人間国宝の森口邦彦氏らが特別功労賞を受賞。</p> <p>○海外の歌劇場の専属指揮者や音楽監督などを務め、国際的に高く評価されている指揮者の阪哲朗氏、藤山寛美氏の芸風を受け継ぎ、上方の喜劇文化の普及に貢献している俳優の藤山直美氏らが功労賞を受賞。</p> <p>○京舞井上流の名取で多くの舞台を踏みつつ、後進の指導にも尽力している日本舞踊家の井上安寿子氏、奈良・平安時代を中心に優れた作品を執筆し、4回直木賞候補になった小説家の澤田瞳子氏らが奨励賞を受賞。</p>
---------	--

	氏名	受賞者紹介	
特別功労賞	杭迫 柏樹	書家	長年にわたる鍛錬と研究により、素朴でありながら格調高く気品のある独自の書風を追求している、日本を代表する書家の一人。日中文化交流団の団長を務められるなど、日本の伝統文化の国際的地位の確立にも貢献。
	熊倉 功夫	歴史学者	茶道をはじめとする生活文化の研究を行い、歴史的見地から、地域毎に多様な食文化を「和食」という体系にまとめ上げ、和食研究の第一人者として活躍。和食のユネスコ無形文化遺産登録にも大きく貢献。
	竹市 雅俊	細胞生物学者・発生生物学者	動物細胞間の接着・認識機構研究の世界における第一人者で、細胞と細胞が接着するときに必要なタンパク質を発見し、「カドヘリン」と命名。「カドヘリン」は、癌の治療への応用など、医学分野からも注目されている。
	森口 邦彦	染色家	フランス留学の経験から、日本の伝統的意匠をモチーフに、幾何学的な構成と斬新なデザイン文様による友禪を発表し続けており、国内外で高く評価されている。日仏文化交流にも大きく貢献。
功労賞	河村 晴久	シテ方能楽師 観世流	能楽師として多くの舞台で優れた舞を披露し、高く評価されている。海外での英語講演を実施し、「伝統音楽普及促進事業実行委員会」を主宰して教育界と協働した教材を開発するなど、外国人や次世代への能の普及にも大きく貢献。
	近藤 高弘	陶芸家・美術作家	金や銀、プラチナを結晶させた独自の技法「銀滴彩」による作品や、ガラスを取り入れた作品など、陶芸の枠を超えた独創的な作品を次々と発表し、国内外で高く評価されている。
	通崎 睦美	木琴奏者	クラシック音楽分野で世界唯一の木琴奏者として、作曲・編曲からソロ、様々な楽器とのデュオや交響楽団との共演まで、幅広い音楽活動を展開。著書が学芸賞を受賞し、着物と古美術品のコレクションの展覧会を開催するなど、多彩な才能を発揮。
	阪 哲朗	音楽家	ヨーロッパの多くの国々で歌劇場の専属指揮者や音楽監督を務め、国際的に活躍して高く評価されている。現在は国内に戻り、山形交響楽団の常任指揮者に就任しており、京都でも毎年公演を行っている。
	藤本 由紀夫	アーティスト	サウンドアートのパイオニアで、音を聞く体験を作り出す独創的な芸術活動が国際的に高く評価されている。音を形で表現した「サウンド・オブジェ」やそれを使用したパフォーマンスなどの作品制作に加え、展覧会のキュレーションも手掛ける。
	藤山 直美	俳優	父・藤山寛美氏から受け継いだ芸風で人々を魅了し、舞台、テレビ、映画と様々な活躍しており、上方の伝統的な喜劇文化の普及に大きく貢献。令和2年には紫綬褒章を受章。
	八幡 はるみ	染色作家	伝統的な技法による手仕事だけでなく、最先端のデジタル技術も積極的に取り入れて、芸術と日常の両方を作品で表現し、高く評価されている。長年、教育者として後進の指導にも尽力。
奨励賞	あごう さとし	劇作家・演出家	自身の演劇活動に加え、「アトリエ劇研」のディレクターとしても活躍。「アトリエ劇研」を含め、京都の小劇場が相次いで閉館する中で、昨年「THEATRE E9 KYOTO」設立に尽力し、初代芸術監督を務めるなど、京都の演劇界を牽引している。
	井上 安寿子	日本舞踊家	人間国宝の五世井上八千代氏の長女で、平成18年に井上流名取となる。数多くの公演への出演や京舞公演「葉々の会」の主宰など、舞の研鑽を積みつつ、後進の指導や日本舞踊の普及にも尽力。
	酒井 健治	作曲家	非常に高度な作曲技術を持ち、海外の受賞歴も多く、国際的に高く評価されている。作品群は国内外で著名な楽団に演奏され、作品の個展も開催されており、京都の作曲界を担う存在の一人として期待されている。
	澤田 瞳子	小説家	現在活動している作家では唯一、奈良・平安時代の小説を主に執筆。直接史料にあたり、当時の一般の人々の生きざまを描く。平成27年の『若冲』から、今年の『能楽ものがたり 稚児桜』まで4作品が直木賞候補となった。
	谷原 菜摘子	画家	ベルベットの上に、油彩や人工宝石、金属粉など様々な素材を使って、人間の負の歴史や美的な文化を融合させた独特の世界観から生み出される、華麗で毒のある幻想的な作品が注目されている。
	服部 しほり	日本画家	日本画の線描の魅力をよみがえらせ、独自の世界を創出する作品で日本画に新風を吹き込み、多くの受賞歴を持つ。平成30年に完成した、長崎県の日蓮寺の襖絵などが高く評価されている。